

人間総合科学研究科の設立

牧野順四郎

人間総合科学研究科長 心理学系教授

1. 筑波大学博士課程研究科の問題点

大学はいま大きな分岐点にさしかかっている。進むべき一つの道は研究の重視であり、もうひとつは教育重視である、という。大学はこの両方を担ってきたという自負からすれば、どちらかの選択はこれまでの考え方に大きな修正を迫るものである。

大学批判が強まってきた背景に、経済事情の悪化や日本型人的経営の見直しがあることは明らかで、会社で人材養成をやる余裕を失ったことが、大学への注文としてもっと実践的（役に立つ）教育をすべき、あるいはもっと世界的に通用する研究をすべき、という注文となって表れたふしがある。大学院博士課程にしてみれば、後者の注文が手厳しい。

世の中がどう変わろうが、大学院がやるべきことは変わらない。それは高度な研究の遂行と優れた人材（研究者・高度専門職業人）の育成である。しかし、大

学院の本質である高度な研究に注文がついた。それほど劣った研究ばかりをしていたのかと問われれば、それはノーであるから、注文がついたことの意味は、大学は手抜きしないで研究をしっかりとやってくれということであろう。ならば、どこに手抜きがあったのか、現状はこれでもいいのかを評価し、それに基づいて改革を試みるのがわれわれの最善の回答である。

本学博士課程研究科の最大の問題は、これまで各研究科がそれぞれ独立した組織として併存してきたことである。これにはもちろん長所と短所があるが、最大の短所は、研究科が特定学問デシiplinaryの磐と化しやすく、研究科間で相互の学問的交流がほとんど必要ない、したがってよほど努力しなければ交流が起こらない点であろう。異種のものが衝突することから新たな展開が生ずるのが世の習いとすれば、この研究科並立は長期的

にみて衰退を確実に予想させる。

人間をあつかう諸学はその欠点を直接に受ける。個人は本質的には1個の全体として存在する。諸学はそれを各方面から切り取るにすぎない。諸学をどう総合すれば人間の総合理解になるのかはまだ未知であるが、少なくとも諸学が不断に交流しつつ、人間は種々の異なる視点から捉えられることを確認し続けることが必要である。本学の研究科の併存が制度的にこれを困難にしてきたことは否めない。

2. 人間総合科学研究科の発想

人間に関する学問は沢山ある。これらは、人間の文化・社会的あつかいを中心とするいわゆる人文系と、人間そのものをあつかう‘人間系’に分類することができよう。この枠からみれば、本学の博士課程研究科のうち、いわゆる人間系研究科（教育学・心理学・心身障害学）の他に、専門系の研究科（体育科学・芸術学）も同じ枠に入るし、実は医学研究科もそうである。医学は一般には理系とみなされるので、人間系には入らないように思われたが、基本的に人間そのものをあつかっているという点では、典型的な人間系の学問領域だということができる。このような認識がむしろ医学側から提起されたことが、人間総合科学研究科

実現の大きな契機となった。そして医学研究科の連携が、この研究科を極めてユニークなものとした。

6研究科から研究科長を中心とする協議会メンバーを集めて幾度も論議を重ねた結果、人間そのものをあつかう学問領域の結集と連携によって人間を総合的に科学する研究と教育の新たな場として、人間総合科学研究科を設立し、なおいっそうの発展を期することで一致した。これが最大のポイントであった。それ以後の具体案の作成は、献身的な協議会メンバーの努力でスムーズに進行した。

3. 既存研究科ベースの専攻と新設3専攻

人間総合科学研究科の設立計画は、既存の6研究科をベースにした11の専攻からまず出発した。教育学2専攻、心理学専攻、心身障害学専攻、体育科学専攻、芸術学専攻、医学5専攻がそれである。これらの専攻は、これまで30年の間、前身校を含めれば50年以上の間（前前身校を含めれば100年以上）、優れた研究と教育の実績を積み上げてきた研究と教育の場（学系・研究科）ばかりである。

これら11専攻は、狭く深く常に先端研究を追求するのに慣れており、これからも専門的にさらに高度な研究を追求し続けていくはずである。これらはいずれも

その歴史を考えれば、どんな時代にも耐えて生き延びられる固有の優れた実績をもった専攻だといえる。人間総合科学研究科は、これら確固とした11専攻を基礎に据えることにより、容易にその構想・計画が可能だったのである。

人間総合科学研究科の設立に際して、人間に関する諸学の連携と統合を象徴する新たな専攻設立を模索した。その結果、(1) ヒューマン・ケア科学専攻、(2) 感性認知脳科学専攻、(3) スポーツ医学専攻の新設を求めて計画を立てることが確認された。(1) には、人間の現実の諸問題に対処する方法や方略をまさに総合的に探ることをめざし、教育学、心理学、心身障害学、体育科学、医学がこの旗の下に集まった。(2) には、感性を含む(高次)精神機能と脳機能を架橋するべく優れた学際研究をめざし、芸術学、心理学、心身障害学、医学が結集した。(3) は、スポーツ傷害の治療・リハビリテーションや生活習慣病の治療を心身障害学、体育科学及び医学が連携した専攻である。

これらは、いずれも人間に関する諸学が連携してひとつの統合領域をめざすという点で、これまで例をみない専攻であり、内容もユニークである。これらは人間総合科学研究科の設立計画がなければ発想すらできなかったものである。

4. 人間総合科学研究科の将来

3つの新専攻は、内容がユニークなだけに非常に目立ち、人間総合科学研究科の看板ともいえるものである。本研究科の発足に先だって多くの問い合わせが全国から寄せられたのも、これらの新専攻にかける期待の高さを伺わせる。われわれもまた3新専攻においてユニークな研究が生まれることを期待している。

しかし本研究科の成否は、実は旧研究科をベースにした11専攻の、これまで以上の高質な研究と教育の推進にかかっている。新専攻は、これら11専攻の広く確固としたすそ野を土台にして初めて成り立つ統合領域だからである。

これまでそれぞれ違う家に住んでいた教官・学生が、人間総合科学研究科という大家の14部屋に住まう住人となった。そのうちの3部屋には生まれ育ちの違う人々が同居する。お互いに時々は襖を開けてはお隣さんを訪れてお茶のみ話をし合えば、それが思いがけず面白い研究を産み出すきっかけとなるかもしれない。部局化や大規模な予算狙いもさることながら、大研究科はこのような異文化交流(衝突)にこそ意味があるとは考えられないだろうか。

(まきのじゅんしろう 比較心理学)